

令和 6 年 4 月 14 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00510

研究課題名（和文）アルベール・ロンドルとルポルタージュ文学の誕生

研究課題名（英文）Albert Londres and the Birth of Literary Reportage

研究代表者

真野 倫平（Mano, Rimpei）

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：30257232

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、両大戦間期に活躍したフランス人ジャーナリスト、アルベール・ロンドルのルポルタージュの歴史的意義について考察した。そのためにロンドルの著作およびジャーナリズムに関する研究書、ロンドルが扱った主題の関連資料、現実の記述に関する理論的著作などを入手し分析を加えた。また、3回にわたってフランスに研究出張を行い、資料収集ならびに現地の研究者との情報交換を行った。研究成果として、アルベール・ロンドルに関する単著を1冊、彼の日本滞在に関する論文1編、さらに歴史記述やジャーナリズム報道における現実の記述に関する論文3編を公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ジャーナリズムという分野はこれまで文学においても歴史学においても十分に研究されてこなかった。その意味でルポルタージュを文学と歴史学の総合的観点から検証することは学術的に重要な意味を持つ。とりわけアルベール・ロンドルに関する単著の刊行は、このジャーナリストの日本への最初の本格的紹介という点で画期的な意義を有する。また、世界情勢が混迷を深め正確な報道が求められる今日、メディアの可能性と問題点を歴史的に検証することは社会的に大きな貢献をもたらす。

研究成果の概要（英文）：This study examines the historical significance of the reportage of Albert Londres, a French journalist active during the interwar period between the two world wars. For this purpose, we analyzed Londres' writings, researched books on journalism, reviewed documents related to the subjects Londres reported on, and studied theoretical works on the description of reality. I also made three trips to France to collect materials and exchange information with local researchers. As a result of my research, I have published one book on Albert Londres, one article on his stay in Japan, and three articles on the description of reality, encompassing history and journalism.

研究分野：仏文学

キーワード：仏文学 ジャーナリズム 現代史

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) アルベール・ロンドルは両大戦間期に活躍したフランス人ジャーナリストである。第一次大戦中に戦争特派員として名を挙げ、戦後に国際リポーターとして活躍したのち、徒刑場、精神病院、軍隊刑務所、植民地、海外の娼館などで調査を行い、ルポルターージュをジャーナリズムの最重要ジャンルに位置づけた。とはいえ、日本はもとよりフランスにおいても、彼の仕事に関する学術的研究はかならずしも進んでいない。

(2) ジャーナリズムというジャンルは、文学と歴史学の境界に位置することもあり、これまでかならずしも学術的に優先的に研究されてこなかった。それは文学研究においては実用的な読み物として周辺のジャンルに位置づけられ、歴史研究においては確実性よりも迅速性を重視するがゆえに公文書などに比して不確実な資料として扱われてきた。

(3) 本論の目的はそのような過去のジャーナリズムに光を当て、その歴史的意義を明らかにすることにある。ジャーナリズムは歴史や政治と密接に結びついたジャンルであり、文学と現実の関係を解明するうえできわめて重要である。それを研究することは、文学研究においては「事実の文学」というジャンルの理解に寄与することであり、歴史研究においてはこれまで軽視されてきた新たな史料分野を開拓することにつながる。さらに、世界情勢が混迷を深め正確な報道が求められる今日、メディアの可能性と問題点を検証することは社会的にも大きな意義を持つ。

2. 研究の目的

(1) まず、文学と歴史学を総合する学際的な観点から、アルベール・ロンドルの業績の再検討を試みる。まず、ロンドルの記事ならびに著作を分析することで、彼の記事の文体的特徴を明らかにし、その独自性がいかなる点にあったのかを検証する。さらに、彼の記事が読者にどのように受容されたかを探究し、彼の提案が圧倒的な支持を受けた理由についても考察する。

(2) 次に、ロンドルが活躍した当時のジャーナリズムの状況を解明する。第三共和政時代はジャーナリズムの成長期で、大衆新聞が大きな影響力を振るった時代である。この時代にリポーターと呼ばれる記者たちが登場し、ルポルターージュが重要な地位を獲得した。そのような状況においてロンドルが果たした役割を検証することで、ジャーナリズムの発達とリポーターの地位向上の過程を歴史的に解明する。

(3) 最後に、第三共和政時代の市民社会の大衆心理について考察する。ロンドルが扱った徒刑場、精神病院、軍隊刑務所、植民地、娼家といった主題は、同時代の読者にとって知られざる、それだけにいっそう関心をかきたてる対象だった。それは当時の市民社会が犯罪者や異民族、下層階級や精神異常者に対して抱いていた無意識的な恐怖を反映するものであり、大衆の隠された欲望を解き明かす鍵である。

3. 研究の方法

(1) まず、基本資料として、ロンドルの著作および新聞記事を入手した。入手困難な版については古書店から購入、あるいはフランス国立図書館に複写を依頼した。新聞記事についてはフランス国立図書館のwebサイト「ガリカ」を利用した。ロンドルに関する調査がある程度進展した段階で、さらにアンリ・ベロー、エドゥアール・エルセーといったジャーナリストの著作へと調査領域を拡大し、同時代のジャーナリズムの全体像を把握した。

(2) 次に、ジャーナリズムに関する研究書、さらにロンドルが扱った主題(徒刑場、精神病院、軍隊刑務所、植民地、娼館)についての関連資料を入手した。これについても図書を書店あるい

は古書店で購入するか、フランス国立図書館に複写を依頼、あるいはフランス国立図書館の web サイト「ガリカ」を利用した。これによってロンドルが活躍した两大戦間期の政治的・社会的状況を把握した。

(3) 定期的にフランスに出張し、フランソワ・ミッテラン国立図書館をはじめとする各種図書館で資料調査を行うとともに、書店および古書店において資料収集を行った。また、ヴィシーのアルベール・ロンドル記念館と連絡を取り、現地の研究者と意見交換を行った。さらに、ロンドルの研究団体「アトリエ・アルベール・ロンドル」の研究者たちと接触し、ロンドル研究の現状について情報を収集した。

(4) コンピュータを用いて以上の資料や情報を分類・整理した。それを重要な主題ごとに分析し、それに基づいて論文を執筆し関連誌に発表した。最終的に、ロンドルの主要業績とジャーナリズム史におけるその役割を解明し、著作という形で刊行した。

4. 研究成果

(1) まず、ロンドルの業績の全体像を把握し、その特徴を分析した。彼は入念に彫琢され劇的に構成された記事によって、ルポルタージュを文学作品に並ぶ地位に押し上げた。さらに、彼が調査を行った徒刑場、精神病院、軍隊刑務所、植民地、娼館などは、当時の読者の社会的関心が向かう対象だった。ロンドルは記事において、特定の政治的立場に固執せず人間的観点から体制を批判することで、広範な読者の共感を呼んだ。

(2) さらに、ロンドルが活躍した時代のジャーナリズムの状況を解明した。彼がキャリアを開始した二十世紀初頭は、大衆新聞の全盛期であり、リポーターが重要な地位を獲得した時代だった。メディアは第一次大戦中にプロパガンダに利用され、戦後にはそのことで厳しい批判にさらされた。ロンドルはそのような状況の中で社会の暗部にメスを入れ、調査ルポルタージュを社会に貢献する有益なジャンルとして位置づけた。それはメディアへの失われた信頼を回復するとともに、戦後の読者の新たな知的関心に応えるものだった。

(3) 最後に、第三共和政下のメディアと権力の関係を解明することを試みた。この時代に急成長を遂げたメディアは「第四の権力」としての地位を確立し、権力の監視者としての役割を引き受けた。とはいえ実際にはメディアと権力の関係は複雑であり、大衆ジャーナリズムと共和国政府の間には暗黙の共犯関係が存在した。ロンドルの記事も、反体制を標榜しつつ共和国の根本原理に対しては肯定的な姿勢を取るなど、絶妙なバランス感覚に基づいており、それが彼の成功に大きく貢献した。

(4) 以上の研究成果を踏まえて、ロンドルに関する単著 1 冊、彼の日本滞在に関する論文 1 編、さらに歴史やジャーナリズムなど現実の記述に関する論文 3 編を公刊した。単著はロンドルのリポーターとしての主要業績とジャーナリズム史上で果たした役割を解説するもので、彼の日本への最初の本格的な紹介である。ロンドルの日本滞在に関する論文では、1920 年代における日本とフランスのジャーナリストの出会いを検証した。他の 3 編の論文においては、歴史記述やジャーナリズム報道の分析を通じて、現実をいかに記述するかという問題について考察した。また、2023 年には毎年ヴィシーで開催される「アルベール・ロンドル会議」に参加し、ロンドルの日本滞在に関する口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Rimpei Mano	4. 巻 30
2. 論文標題 Albert Londres au Japon : la rencontre des journalistes francais et japonais dans les annees 1920	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 南山大学ヨーロッパ研究センター報	6. 最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 真野倫平	4. 巻 第28号
2. 論文標題 歴史家が自己を省みるとき - ブシュロン『歴史家を職業とする』、ヴネール『失踪者 シルヴァン・ヴネールに関する調査』について -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 南山大学ヨーロッパ研究センター報	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15119/00003962	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 真野倫平	4. 巻 第27号
2. 論文標題 歴史におけるフィクションの役割 - コルバン『知識欲の誕生』、ヴネール、ブシュロン『条件法の歴史』について -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 南山大学ヨーロッパ研究センター報	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15119/00003095	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 真野倫平	4. 巻 26
2. 論文標題 歴史家の目がとらえた三面記事事件 イヴァン・ジャブロンカ『レティシア』について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 南山大学ヨーロッパ研究センター報	6. 最初と最後の頁 63-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15119/00002897	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Rimpei Mano
2. 発表標題 Albert Londres au Japon
3. 学会等名 Les Rencontres Albert Londres (招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 真野倫平	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 380
3. 書名 アルベール・ロンドル 闘うリポーターの肖像	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------